

災害対策のために新築移転した 地域の人々に寄り添う医療の拠点。



多目的トイレ



1F内視鏡センター内に設けられた多目的トイレ。オストメイトのための設備、おむつ交換にも利用できる収納式の多目的シートなどが備えられている。

2019年5月6日、新築移転した高知赤十字病院がスタートしました。広域的な災害拠点病院としての役割を果たすために免震構造とし、屋上ヘリポートを設置。災害時のさまざまな非常用設備も強化しました。入退院手続きや相談対応などを一元化して行う患者支援センターも開設。「愛され、親しまれ、信頼される病院づくりを目指します」という理念の実現に向けて、安心・安全を未来へつなぐ医療拠点となっています。



イオンモール高知東側の、シキボウ高知工場跡地に移転。新たな地域のコミュニティが誕生した。

万一の南海トラフ地震の発生時にも しっかり対応できる災害拠点病院。

高知赤十字病院は、これまでの施設の老朽化や、スタッフの増加で手狭になったことも背景に、新築移転計画を推進。南海トラフ地震の発生時における津波を想定し、長期浸水や地盤沈下の恐れがない、新たな土地に移転しました。隣の敷地にある高知市北消防署との連携も図れるエリアです。新しい命の砦では、非常用発電機を屋上に複数台設置するなど、災害対応を強化しました。上水の備蓄が3日分、下水も3日分貯水でき、雨水もトイレの洗浄水として3日分利用可能。井水の浄化装置も備えています。さらに災害時には4床室を6床室に変更できるように考慮されています。

デザインは病院らしくない温かみがあり、各所に高知県産材を使った家具を採用。木の持つ温もりが感じられる空間となっています。高知の伝統である「フラフ」という大きな旗も院内にデザインされました。また、高知県内初となる女性専用フロアを開設するなど、患者さんが安心して利用できる数々の工夫も施されています。



エントランス壁面の「フラフ(大旗)」には、県花のヤマモモや、県鳥のヤイロチョウなどを表現した。

高知赤十字病院

- 竣工年月/2019年4月
- 所在地/高知県高知市秦南町1-4-63-11
- 施主/高知赤十字病院
- 設計・監理/株式会社久米設計
株式会社ASA設計事務所
- 延床面積/32,849.00m²
- 病床数/402床



2Fの図書ラウンジ。外からも見える広い窓を持ち、木の温もりに癒される空間である。

井桁型の平面計画で、オープンエンドは開放感あふれる癒しの空間として利用。

病院の1Fには救命救急センターや内視鏡センターなど、2Fには外来や検査部門、患者支援センターなど、3Fには手術室やICU、リハビリテーション科など、4Fにはホールや管理部門が設けられています。5Fは女性専用フロア、6~8Fは基本的に疾患別に分かれた病棟であり、1フロア2看護単位となっています。

建物は、井桁型の平面計画にすることで、さまざまな動線を短縮。廊下の突き当たりのオープンエンドは、山、市街地、商業施設など、方角によって見える外の景色が異なり、どこに居かがすぐに分かるメリットもあります。「広いガラス面から、自然光と山の緑が飛び込んでくる感じで、癒しの空間になっています」「疲れた時に、ここからちょっと外を眺めるだけでも気分がリフレッシュされます」と、スタッフにも好評の空間となっています。

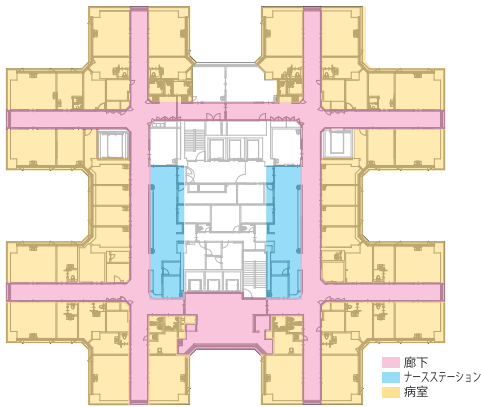
voice 院長先生からの声

災害に強い病院として生まれ変わりました。



院長
浜口伸正さん

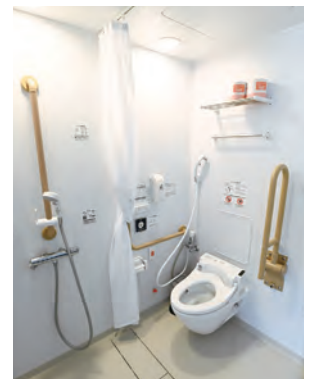
東日本大震災の時に、当院からも石巻赤十字病院に支援スタッフを送り出しました。そこで、震災前の移転によって浸水を免れた石巻赤十字病院の姿を目にしたスタッフの報告もあり、私たちが旧病院の場所のままだと、長期浸水や地盤沈下を避けられないと考えるようになりました。そこで、2011年のうちに新築プロジェクトを立ち上げ、移転に向けてスタートしました。距離にして800mの移動ですが、災害に強い病院として生まれ変わり、高知市とは救急の協定も結び、高知の救急・災害救護の拠点として動き出しました。



6~8F 平面図



6Fの特別室。シンプルなデザインで、落ち着いた空間となっている。



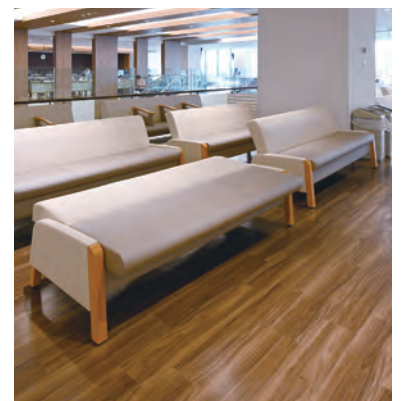
特別室のトイレシャワーブース。はね上げ手すりやL型手すりなどが備えられている。



6F病棟の廊下。オープンエンドは全面ガラスの窓とし、外の景色を借景とした癒しの空間になっている。



個室のトイレの扉には、押しでも引き、引いても開く、2方向に開閉するスライドドアを採用。患者さんの状態によって使い分けができる。



2Fロビーのソファは、緊急時には背もたれを倒してベッドとして利用できる。



4Fホールの隣に設けられた、レセプションエリアとしても使えるオープンスペース。眺望も良く、スタッフが食事に利用するなど、リフレッシュできる多目的空間である。



4Fのスタッフ用トイレ。大便器は清掃のしやすい壁掛けタイプである。



シックで濃いブラウンを基調にした、落ち着いた雰囲気のあるスタッフ用トイレの洗面コーナー。

今までの建物にあったトイレの狭さや臭いなどに関する諸問題を解決。

移転する以前の旧病院は建物も古く、クレームも多かったのがトイレの狭さや臭いなどに関するものでした。そこで、水まわり計画にも丁寧に取り組み、看護部など現場の意見も大切にしながら設計されました。

しかし、あからさまに目立つ場所にトイレを設けて主張するのではなく、必要な時に使えるように必要な場所に配置する、「トイレの適材適所」を大切にしています。

そして、新病院は環境に優しい建物であることも大きな特徴です。エネルギー消費量を50%削減した「ZEB Ready」カテゴリで、400床以上の病院用途では全国初となるBELS (Building-Housing Energy-efficiency Labeling System) の認証を取得しています。

voice 設計担当の方からの声

特にヒアリングを重視しながら設計しています。



株式会社久米設計
設計本部 医療福祉設計部
上席主査
栗原崇さん

病院設計では、ヒアリングが重要になります。押しでも引いても開閉できるスライドドアを個室のトイレに提案したのは、看護師へのヒアリングの中で必要性を感じたからです。今回、食堂の内装や家具の選定にもアドバイザーで関わり、全体的に統一感のある空間にまとめられたのは良かったと思います。特に2階の南側待合は、病院の外から見える様子までを考えて設計し、そこに居る人にも、外から見る人にも、心地よい相乗効果を期待しています。



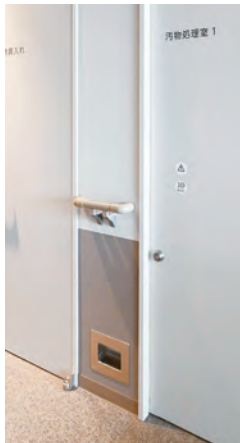
2Fの採尿用トイレ。隣り合った男性用と女性用を分かりやすく表示している。



車いすでも使いやすい、十分な広さを確保した採尿用トイレのブース。はね上げ手すり、背もたれ、L型手すりが備えられている。



採尿用の女性用トイレは、シンプルで分かりやすい配置がなされている。



汚物処理室の自動ドアは、足を入れるとセンサーで開くことができる。



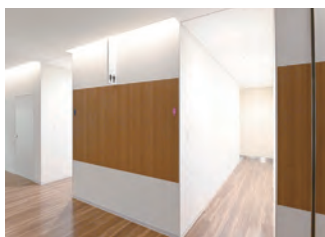
感染対策として各所にアルコール棚を設け、使用を増やしている。



病棟のスタッフステーションの出入口に設けられたスタッフ用手洗器。



2F泌尿器科に設けられた検査用トイレ。尿流量測定装置や、オストメイトのための設備などが備えられている。



2F外来のトイレ。シンプルで分かりやすいサインを、照明がサポートしている。



2F外来の男性用トイレのブースには、L型手すりのほかにベビーチェアも設けられている。



男性用トイレの小便器にも壁掛けタイプを採用しているため、清掃しやすい。



2F外来の女性用トイレ。使いやすい大きな鏡を設けた癒しの空間となっている。

voice 看護副部長さんからの声

実際の患者さんの行動を、丁寧に検証しました。



看護副部長
小松ゆりさん

東京のTOTOテクニカルセンターに足を運び、点滴台や車いすも使ってトイレブースの広さなどを検証しました。もし患者さんが転倒した場合にナースコールが押せる位置も、丁寧に検討しました。壁掛け式の大便秘器は、車いすでも下に足を入れることができ、使いやすと思います。病棟の廊下にタイルカーペットを採用したのは、音が静かですし、病室とともにシックな色合いで気に入っています。

voice 感染管理認定看護師からの声

汚物処理室に自動ドアを採用できて良かったです。



感染管理認定看護師
宮崎真起子さん

汚物処理室のレイアウトは、交差感染を避けるために特に重要です。積極的に意見を出しました。結果として、扉に自動ドアを採用できたことも良かったと思います。トイレは、患者さんがそれぞれに持っている普段の習慣が出てくる場所。触る場所もさまざまですから、清掃しやすいことは非常に重要です。そのためには、できるだけシンプルな構造にしておくことも大切ではないでしょうか。

voice 整形外科病棟の看護師長さんからの声

患者さんに介助方法を合わせられるトイレです。



整形外科病棟
看護師長
大崎君子さん

設計には看護部の意見も反映してもらい、背もたれ付きの付いたトイレを設ける希望もありませんでした。同じ車いすといっても、患者さんによって介助の方法は異なりますから、十分なブースの広さを確保できたのは大きいです。スタッフ用手洗器は、みんながよく通るスタッフステーションの出入口に2カ所設置。ポウルが深くて水はねしにくく、肘まで洗えますし、以前よりも手洗いの回数が増えました。

内視鏡センターにはさまざまなトイレを適材適所で設けて多くの患者さんに対応。

1Fには、マルチライト照明やOアーム型透視装置などを導入した内視鏡センターを開設。前処置室の周りには、タイプの異なるトイレを7カ所配置しています。検査のために下剤を服用するなどトイレが重要となる場所であり、まさに「トイレの適材適所」を実現しました。限られたスペースで、できるだけトイレの数を多く確保するために、アール型扉のトイレブースも採用。導入にあたっては、看護師がショールームや実際にアール型扉を採用しているビルを訪れるなど、実際に使ってみてその良さをしっかりと確認しています。



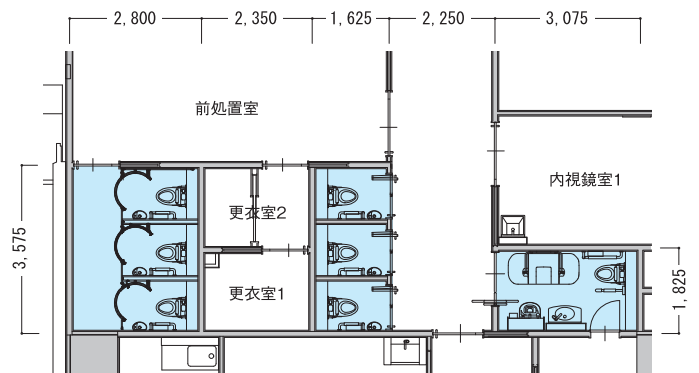
内視鏡センターの前処置室に設けられた、アール型扉の省スペースのトイレブース。



アール型扉のトイレブース内には、背もたれやL型手すり、手洗器などが設置されている。



内視鏡センターの前処置室。高知県産材を使用した温かみのある家具を配置している。



1F内視鏡センター周辺 平面図



内視鏡センターには、さまざまなタイプのトイレが設けられ、患者さんの状態に合わせて使い分けることができる。